

現象性へのアクセス

太田紘史

1. 報告不可能な意識？

意識は、質と密接に関連している。即ち、意識内容は現象的である。心的表象の内容や様相に関連する何らかの質が意識に呈示される。

意識は、意図と密接に関連している。即ち、意識内容はしばしば意図的な行動を引き起こすために利用可能である。

意識は、記憶と密接に関連している。即ち、意識内容は短期記憶ないし作業記憶に入り、ときに長期記憶に入る。意識内容は明示的な思考と推論に利用可能であり、その一部は長期的に検索可能となり、学習や連合に貢献しうる。

意識は、注意と密接に関連している。即ち、どの意識内容がさらなる認知過程に利用されるか（もしくは、そもそもどの内容が意識的になるのか）は、受動的要因や能動的要因に起因する注意に左右される。

意識は、報告と密接に関連している。即ち、意識内容は通常報告可能である。実際、我々は、他者が何を意識しているかを知るためにしばしば（直接的あるいは間接的な、そして言語的あるいは非言語的な）報告に頼っており、報告行為と報告内容は意識内容を決定するための基準として利用可能である。

意識は、内観と密接に関連している。即ち、意識的表象は内観の対象になりうる。例えば目の前の赤いリングを意識するとき、「赤いリングがある」と思考するだけでなく、「私は赤いリングを見ている」と思考することができる。

以上の暫定的に特徴づけられた意識の側面のうち、最初のもは意識の非機能的概念が捉えようとするものであり、それ以外は意識の機能的概念が捉えようとするものである。

もし心的状態が意識的であるのは、それが現象的であるがゆえだと考えるなら、意図、記憶、注意、報告、内観との接続という機能的側面は、意識の本性には関係がないとみなされるかもしれない。しかし、仮にあなたの知覚内容が、意図、記憶、注意、報告、内観に利用されえないようなものだが、それは現象的であるとしよう。それでもその知覚内容は意識的だと言えるのだろうか。例えば、あなたが目の前に赤いリングを見たとしても、あなたはそれで空腹を満たそうとせず、それについて思考し判断することができず、それは

自分の関心を一切呼び起こさず、それについて言語的にも非言語的にも一切表現することができなければ、誰かに問われるときには（そして自分で自分に問いかけるときにも）自分がそれを見ていることを否定する。しかし、仮説によってそれは現象的である。さて、あなたは赤いリングを意識しているのだろうか。もし、そのような状況をも意識と呼ぶに値すると考えるなら、そこで想定されている意識概念は非機能的なものである。他方、意識と呼ぶに値しないと考えるなら、そこで想定されている意識概念は機能的なものだ。

Block(1995, 2001, 2005, 2007)は、意識の機能的概念と非機能的概念の区別を提案する。意識には、現象的意識(現象性; phenomenality)とアクセス意識(アクセス可能性; accessibility)の二種類があるという。前者は、「経験」や「...であるとはどのようなことか」(what it is like to be)と同一視され、意識の非機能的概念が捉えようとするものである。これに対し後者は意識の機能的ないし認知的な側面である。当初それは、行為と発話の合理的制御のために準備されている状態として暫定的に定義されたが(Block, 1995)、後にそれはグローバルワークスペース説(Baars, 1988, 1997, Dehaene & Naccache, 2001, Dehaene, Changeux, Naccache, Sackur & Sergent, 2006; 後述)に沿って、表象内容が任意の消費システムによって大域的に利用可能である状態(大域的アクセス可能性、ないし認知的アクセス可能性)として特徴づけられた(Block, 2001, 2005, 2007)。大域的アクセス可能性とは、任意の認知過程への利用可能性であり、例えば報告の基礎過程として必要なものである。では、現象性と、報告の基礎となる大域的アクセス可能性はどのような関係にあるのだろうか。Block(1995, 2001, 2005)は、それらが解離可能であることを示そうとし、大域的アクセス不可能な現象性が実現可能であると主張する。しかし、そのような現象性が実現されうるとしても、それについてのアクセスが不可能である限り、それは報告されることがない。それゆえ少なくとも被験者(主体)の一人称報告によっては、そのような現象性の実現を確認することはできない。すると、そのような大域的アクセス不可能な現象性を意識と呼ぶに値するかという疑問が生じる。そこでBlock(2007)は、現象性と大域的アクセス可能性が解離可能であることの根拠として、それらの神経基盤が別個に同定可能であることを示す。

現象性と大域的アクセス可能性の神経基盤が異なるという主張自体は、そのような仕方で神経基盤を切り分けられるように神経基盤の概念を操作できるということにすぎないのならば、それほど問題ではないだろう。しかし、そのようにして別個の神経基盤を同定できるがゆえに、現象性そのものが大域的アクセス可能性から解離可能であり、それは意識と呼ぶに値するという主張へ転じることは、危険な推論である。果たして、大域的アクセス不可能な現象性というものは実現可能なのだろうか。もしくは、そのようなものが実現可能であるからと言って、それは意識と呼ぶに値するのだろうか。

2. 神経相関物に訴える？

意識の神経相関物（NCC: Neural Correlates of Consciousness）のうち最もよく研究されているのは、視覚的意識に関するものである(Rees, Kreiman & Koch, 2002)。注意への干渉やマスキングによって、呈示される視覚的刺激を意識させないようにし、意識的知覚と無意識的知覚の差異に相関する神経活動の差異を、fMRI や ERP 測定を介して様々な時間的及び空間的解像度で同定することができる。また、大脳皮質の特定部位に磁気刺激を加えることで、そこがどのような種類の視覚刺激の意識に責任があるかを特定することができる。こうして同定される NCC の仮説には、大きく分けて二種類のもので存在する。第一の仮説は、特定の知覚属性に関する神経表象媒体の活動を NCC として同定するものであり、第二の仮説は、特定の神経表象媒体の活動に加えて、大域的な神経活動を NCC として同定するものである。

2.1 二つの NCC 仮説

第一の仮説の根拠は明快なものである。ある意識的知覚内容の差異に相関するような活動の差異を示す神経表象媒体が同定されれば、その媒体の活動こそが意識の神経相関物であるはずだ。両眼視野闘争 (binocular rivalry) とは、被験者が同一の視覚刺激を呈示され続けるにもかかわらず、その意識的視覚内容が次々に交代する現象であり、その神経相関物はよく研究されている(Blake & Logothetis, 2002)。例えば、被験者に顔のスクリーンと家のスクリーンを片目ずつに呈示し続けると、被験者は数秒おきにそれぞれのスクリーンの知覚を交代させるが、このとき高次視覚経路に位置するFFA (fusiform face area) とPPA (parahippocampal place area) の活動の交代が、その意識内容の交代に強く相関することが示されている(Tong, Nakayama, Vaughan & Kanwisher, 1998)。さらに、FFAの障害は相貌失認をもたらし、FFAが正常に機能することなしには、もはや顔を知覚することができなくなる⁽¹⁾。

他方で第二の仮説によれば、これら特定の神経表象媒体の活動だけでは、その表象内容は意識的にはならない。むしろ表象内容が意識的であるためには、中枢神経系の大域的活動が必要であるとされる。この仮説は様々な理論によって提案されているが、最も中心的であるのは Baars(1988, 1997)が提案するグローバルワークスペース説である。人間の認知システムは、同時並列的に作動する、多数の神経表象媒体と消費システムから構成されており、それら各々は特定の処理機能に特化し、無意識的に作動することができる。では、無意識的な内容の表象と、意識的な内容の表象は、認知システムにおいてどのような機能

的差異を有するのだろうか。その答えは、無意識的な表象内容が特定の消費システムにおいてのみ処理されるのに対し、意識的な表象内容は、一連の認知過程の出力を可能にする任意の消費システムにおいて処理されうることだ。それゆえ表象内容が意識的であることは、表象内容が「ワークスペース」に入り様々な消費システムによって大域的に利用可能となること、いわば「放送」されることとみなされる。

Dehaene ら(Dehaene & Nacchache, 2001, Dehaene, et al., 2006)は、ワークスペースの神経基盤を提案する。それによると、刺激強度に依存する感覚皮質の活性化（神経表象媒体の活動）だけでなく、能動的注意に依存して形成される高次連合野と感覚皮質の「反響的神経アセンブリ」（大域的神経活動）が伴うとき、「情報」（表象内容）は報告可能になる。この大域的神経活動は、前頭葉の高次連合野に密に分布し、各感覚皮質領域との双方向の長距離接続を有する神経経路によって可能になるとされる。この神経経路を通じて、神経表象媒体の活性が強化されて持続し、その表象内容が様々な消費システムによって利用可能となる。それゆえ例えば、視覚皮質が活性化されるだけでは、その視覚内容は意識的にはならない。活性化した視覚皮質の内容が、様々な消費システムにとって利用可能となることで、意識的となるのだ。要するに、第二の仮説における NCC は、大域的神経活動である。

2.2 Block による診断、そして飛躍

なぜ、このような二種類の NCC が提案されることになったのだろうか。Block(2001, 2005)は、これら二種類の NCC 仮説は二種類の意識概念に対応するものだと診断する。

それによれば、第一仮説における NCC は、現象的意識の NCC（現象的 NCC）であるとされる。というのも、PPA と FFA が NCC として提案されるのは、PPA と FFA の神経表象内容の差異が意識の内容の差異と相関するからだ。即ち、現象的意識の内容がいかなるものかを決定するのは、これら特定の神経表象媒体の内容である。このような特定知覚属性の内容を与える神経表象媒体は大脳皮質内に分散していると考えられている。例えば、色の NCC は V4 であり、運動の NCC は V5 であるとしばしば言われるが、そのとき、意識内容として色や運動を与えるのが V4 や V5 であると言われているのである。即ち、これらの神経表象媒体によって、Block の言う現象的意識の内容が与えられている。それゆえ、第一仮説における NCC は現象的意識の NCC であるとされる⁽²⁾。

これに対して、第二仮説における NCC は、アクセス意識の NCC（アクセス NCC）であるとされる。グローバルワークスペース説によれば、表象内容が意識的であることは、表象内容が放送され、任意の消費システムによって利用可能となることである。即ち、神経表象媒体が与える内容は、大域的神経活動を基盤とするワークスペースに入ることによっ

て大域的に利用可能（即ち大域的にアクセス可能）となり、一連の消費システムによって実際に利用される（例えば報告される）のだ。大域的神経活動が NCC として提案されるのは、神経表象媒体が与える様々な内容のうち、どの内容が大域的に利用可能となるのか（即ち大域的にアクセス可能となるのか）が、まさにそれによって決定されるからだ。即ち、第二仮説における NCC は、アクセス意識が想定された限りでの NCC であるとされる。

こうしてBlock(2005, 2007)は、現象性と大域的アクセス可能性の神経基盤は異なると主張する。現象的NCCはアクセスNCCと別個の神経基盤であり、明示的に意識され報告された内容は、両者の相互作用の結果として説明される。

しかしやはり問題は、アクセスNCCが活動しない状況において現象的NCCが活動する状況があるならば、そのとき現象性は、その内容が大域的アクセス不可能でありながらも（それゆえ例えば報告不可能でも）実現可能となるのかどうか、そして実現可能であるからと言って、それを意識と呼ぶに値するののかどうかということだ。Blockは、より最近の論文 (Block, 2007)で、大域的アクセス可能性は現象性の要素として含まれない（「構成的条件」ではない）という曖昧な主張（おそらく以前よりも弱い主張）をするが、やはり、それによって大域的アクセス可能性から解離された現象性の実現を示そうとする方針は変わらない。実際、Block(2007)は、FFAが適切に活動さえすれば、主体がその表象内容を知ることができないとしても、それは顔についての「現象的経験の証拠」になると述べる。しかし、仮にBlockの言うとおりに、大域的アクセス可能性と現象性の神経基盤が独立であり、大域的アクセス可能性が現象性から解離可能であるとして、それは意識の名に値するのだろうか。

3 現象性へのアクセス

心的状態ないし心的表象内容が質的であるという理由だけでそれを意識的とみなすことは、少し反省してみれば、すぐに疑われることになる。我々は、主体がそれを意識していることを否定するような内容を、意識的と認めてよいのだろうか。もしくは、我々は、主体が利用できないような内容を、意識的と認めてよいのだろうか。

3.1 Block のデカルト的唯物論

あなたは今この文章を読みながら、眼前に白い背景と黒い文字列を見ているわけだが、仮に隣にいる第三者から「あなたは実は、そこに真っ赤なリンゴをも見ているのですよ！」と突然言われたら、あなたはどう思うだろうか。あなたはそんなはずはない、と抗議するだろう。しかしその第三者は次のように言うのである。「しかし、いくらあなたがそのように否定したところで、やはりあなたは真っ赤なリンゴを見ている可能性は残っているのです。あなたは真っ赤なリンゴの現象的意識の内容に、適切にアクセスできていないだけか

もしれないではないですか!」。あなたは最大限譲歩するとしても、やはり次のように言うに違いない——「仮にあなたの言うように、私は真っ赤なリンゴを見ているのだとしましょう。でも、たとえそうだとすると、私はそれを意識的に見ているのではなく、せいぜい無意識的に見ているのだ、と言うほかありません」。

大域的アクセス可能性から解離された現象性なるものは、主体によって報告されることもなければ、他者に問われるときにはもちろん、自身で自身に問うときにも、主体によって否定されるような内容である。そのような内容は、意識的と呼べるだろうか。

主体を構成する特定の神経表象媒体が、何らかの意味で特権的な仕方内容を提供するからと言って、主体そのものがその内容に関して意識的であるとは限らない。神経表象媒体が意識的であることと、主体が意識的であることは別だからだ。さらに、主体が、神経表象媒体の活動だけではなく、消費システムの活動を介して（例えば）知覚の内容を享受し、判断し、利用し、報告するのだとしたら、我々は、そのような過程から解離された内容を意識的と呼ぶことができるだろうか。そして、そのような過程の候補が、大域的アクセス可能性に他ならないのだとしたら、大域的アクセス可能性から解離された現象性の身分は疑わしくなる。

Dennett(1991)は、意識は「一人称操作主義」が妥当になるようなものだと論じる。操作主義とは、科学的対象の性質を、観察や実験においてどのように捉えられるかという観点から定義する立場を指す。意識の内容は、主体の一人称観点から観察された内容として固定されるものであり、その意味で、意識は一人称観察による操作主義が妥当となるものなのだ。そして、主体による一人称観察が、神経表象媒体だけでなく、常に消費システムの活動を介しているのだとしたら、消費システムを介してアクセスされえない内容（またときには、消費システムによって排除されるような内容）を神経表象媒体が有したところで、それは少なくとも主体の一人称観察の内容としては記録されない。「私が意識しているものとは、私がそれへのアクセスを有しているものであり、(強調点を変えて) 私がそれへのアクセスを有しているものである」(Dennett, 1978)。

Block の NCC 診断の正体は、その活動が意識的内容を与えるために必要十分であるような特権的な意識中枢を脳内に措定すること、即ち「デカルト的唯物論」(Dennett, 1991)に他ならない。Block はこれまで、意識に関する反機能主義者として、(もちろんいかなる二元論でもなく) 物理主義を徹底する道を追求してきた(Block, 1978)。それゆえ Block は、意識内容に関連する機能的な認知過程の基盤をアクセス NCC と名付け、神経表象媒体を現象的 NCC と呼ぶことで、物理主義が生き残る余地を確保しようとしているのである。しかしもちろん、そのような追求が迎える結末は、主体が一切利用できず、報告もできなければ否定するような現象性だ。結局のところ、Block 流のデカルト的唯物論が(あえて)無視しているのは、意識内容は認知的にアクセスされるものだという要件である。

では、意識内容にはどのような認知的アクセスが必要なのだろうか？ 即ち、現象性に伴うアクセスを、どのようにして特徴付けることができるのだろうか？ それを知るためには、そもそも我々がどのようなときに、主体が意識的内容を享受しているとみなすかを反省すればいい。

3.2 意識の基準

ある内容が意識的であるかどうかを決めるための基準として、大きく分けて、三種類のものが可能だ。それは、主観的基準、客観的基準、そして随意的基準である。

意識に関する基準の第一は、主観的基準である (Merikle, Smilek & Eastwood, 2001)。これによれば、主体がある対象を知覚ないし思考していることを (潜在的にでも) 肯定的に判断し、そして報告しうるとき、その対象に関する知覚や思考は意識的であるとされる。

例えば、被験者が、呈示された視覚刺激を見たとき報告することができるかどうかを意識的知覚の基準とされるとき、そこで採用されているのは一種の主観的基準である。被験者が見たと判断しないような状況において、それでも (例えば) 知覚的識別を示すときに、彼は知覚しているものの無意識的であるとされるのは、この基準による。この基準は、我々の日常的な意識観を捉えている。

意識に関する基準の第二は、客観的基準である (Merikle, et al., 2001)。これによれば、主体がある対象に関する正確な内容ないし情報を有しているとき、主体はそれを意識しているとされる。確かに我々は、何かを意識するとき、大抵は、自身が (例えば) 視覚刺激を見たことを報告することができるが、必ずしもそうではないかもしれない。ときには (例えば刺激強度が十分でないような状況では)、自身が設定した決定基準に基づいて、自身の知覚状態について、それが意識的であったにもかかわらず、否定的な報告することがある。また、被験者の意識的な内容は持続せず、報告過程によって利用される前に消失するかもしれない (Wolfe, 1999)。このような状況ではむしろ、報告に代えて、被験者から視覚刺激に関する正確な情報を引き出せるかどうかを、意識的知覚の基準として採用すべきだろう。例えば被験者が、見えなかったと報告するものの、その視覚刺激に関する正確な識別を示すかどうかを意識的知覚の基準とするとき、そこで採用されているのは一種の客観的基準である。

だが、客観的基準を採用すべき動機は確かにあるものの、その充足が常に意識的知覚を捉えるとは限らない。客観的基準は、闕下知覚の被験者や盲視患者のような、無意識的知覚 (とされているもの) の主体によってすら充足可能であり、多くの偽陽性を出すことになる。客観的基準の充足は、意識的知覚には必要ではあっても十分ではない。しかし他方で、主観的基準の充足は、先程述べたような認知的な制約のゆえに、意識的知覚に十分ではあっても必要ではないかもしれない。この基準は、多くの偽陰性を出すことになる。

第三の基準である随意的基準は、これらの中間的な基準である。これまで一部の論者によって、断片的でありながらも、意識と随意行動の密接な関わりが指摘されてきた(Marcel, 1986, 1988, Dennett, 1991, Van Gulick, 1994, Dretske, 2006)⁽³⁾。もしもこれを意識の基準として採用するならば、次のように言える——我々は、ある内容を随意行動のために利用することができるとき、それを意識している。闕下知覚の被験者や盲視患者は、知覚対象に関する情報を有していても、彼ら自身がそれを見ていることを否定するがゆえに——主観的基準の観点から——無意識的とされることが多いが、我々は別の根拠によっても、彼らが無意識的と見なすことができる。即ち、その知覚内容は、欲求に沿って合理的ないし選択的に自発的な行為を制御するために利用できないという点において、無意識的なのである。闕下知覚の被験者や盲視患者は、強制選択課題において、プライミング効果や識別能力を示すのであって、関連する知覚内容を自ら利用することはない。彼らに欠けているのは、関連する内容を反映した随意行動である。この随意的基準は、客観的基準よりも保守的であり、主観的基準よりもリベラルである。

さて、主体の(例えば)知覚に対してこれらの基準が要求するものを一貫して特徴付ける単一の理論があれば、それは意識の理論として有望であるはずだ。私の考えでは、これらの意識の基準が要求するものの差異を、アクセスの差異として包括的に特徴付けることができる。

3.3 大域的アクセスを巡る競合

意識の大域的アクセス理論は、Baars(1988, 1997)がグローバルワークスペース説として開発した、意識の認知理論の一種である(2.1)。これはBlockによってアクセス意識の理論ないしNCC仮説とされたが(2.2)、現象性に何らかの認知的なアクセスが必要なのであれば(3.1)、解離可能な二種類の意識としての現象的意識とアクセス意識の区分は、もはや成り立たない。このとき、認知的な理論の一種としての大域的アクセス理論は、より積極的に、意識の説明に貢献するはずだ。ここではまず、アクセスなるものが正確には何であるのか、そして我々の認知アーキテクチャがどのような仕方で大域的アクセスを実現するのかを考察しよう。そのうえで、意識の基準(3.2)が要求するものを、大域的アクセス理論の観点から特徴付けよう(3.4)。

我々はすでに、神経表象媒体の内容が意識的であるためには、それがアクセスされなければならないということを見た。しかし我々は、アクセスということでは一体何を意味すべきなのだろうか。我々は、現象性なるものが認知的アクセスから解離しないように、アクセス概念を操作することができる(Chalmers, 1996, chap.6, 1997)。

意識内容がアクセスされていることとは、単にそれが利用可能であることではない。なぜならば、単に利用可能であるというだけでは、記憶内容のすべてが意識的であること

になってしまうからだ。また、意識内容がアクセスされていることは、実際に利用されて行動に反映されることではない。なぜならば、それを要求するならば、いかなる行動にも反映されていない内容は、意識的でないことになってしまうからだ。内容がアクセスされていることは、これらの中間の状況である。即ち、消費システムにとって単に利用可能であるだけではないが、実際に行動出力に反映されていることまでは要求されない。今後、アクセスということで、このような状況だけを意味することにする。我々は、意識を消費システムが関連するような機能的な概念で特徴付けたいならば、それを「アクセス可能性」ではなく、端的に「アクセス」と呼んだほうがよい⁽⁴⁾。それゆえ、大域的アクセスとは、ある内容が任意の消費システムによって、行動への反映の準備に利用されていることである。

では、我々の認知アーキテクチャは、どのような仕方で表象内容へのアクセスを実現するのだろうか。神経系は、独立ないし準独立に機能しうる多数の神経表象媒体から部分的に構成されており、それらに処理される神経表象は、やはり神経系を部分的に構成する一群の消費システムによるアクセスを巡って、競合する。神経表象同士の競合は、神経表象媒体内においても、神経表象媒体間においても起こる⁽⁵⁾。ある内容に対する消費システムによるアクセスは、大域的な（即ち多数の消費システムによってアクセスされている）ものから局所的な（即ち少数の消費システムによってアクセスされている）ものまでの、いずれかである。両眼視野闘争（2.1）や、注意障害としての半側無視⁽⁶⁾は、このような神経表象の競合を、よく示している。

こうして、互いに競合する多数の神経表象内容が意識内容を構成し、そのうち大域的にアクセスされる（即ち、多数の消費システムによって行動出力の準備のために利用されている）ものが、意識的とされる。いわゆる意識的な内容とは、比較的多くの消費システムにアクセスされ、多様な形式で行動傾向に反映されうる内容である。これに対して、いわゆる無意識的な内容とは、比較的少数の消費システムにのみアクセスされ、特定の形式で行動傾向に反映されうる内容である。意識を（相対的に）支配するのは、競合に勝利し、様々な消費システムを介して行動傾向への影響を保っている表象内容——Dennett(1993)が「脳内セレブ」(cerebral celebrity) というメタファーで語るもの——である⁽⁷⁾⁽⁸⁾。

3.4 局所的アクセス、大域的アクセス、メタ認知的アクセス

意識の基準（3.2）のいずれもが要求しているのは、内容へのアクセスである。我々はこれらにおいて要求されるアクセスを、大域的アクセス理論のもとで包括的に捉えることができる。

第一に、客観的基準が要求するものは、内容の最低限の利用を可能にするようなアクセスである。このアクセスにおいては、主体を構成する消費システムのうち、（例えば）識別

に必要な特定の消費システムだけが、その内容を利用することができる。それゆえ、客観的基準が要求するものを、特定の消費システムによる神経表象内容へのアクセス、いわば現象性への局所的アクセスとして特徴づけることができる。

第二に、随意的基準が要求するものは、内容の随意行動への利用を可能にするようなアクセスである。随意行動は、特定の階層化された目的のもとで、選択的に招集された消費システム群が、表象内容を協調的に行動傾向に反映させることで、可能になる(Baars, 1988, chap.6)。このとき、目的に応じて組み合わせられる任意の消費システム群が内容を利用し、随意行動にそれを反映させる。それゆえ、随意的基準が要求するものを、任意の消費システムによる神経表象内容へのアクセス、即ち現象性への大域的アクセスとして特徴付けることができる。

第三に、主観的基準が要求するものは、内容のメタ認知への利用を可能にするようなアクセスである。このアクセスにおいては、メタ認知システム⁽⁹⁾を含む任意の消費システムが、その内容を利用することができる。それゆえ、主観的基準が要求するものを、メタ認知システムによる内容へのアクセス、即ちメタ認知的アクセスとして特徴付けることができる。また、大域的アクセスが、メタ認知システムの作動を保証する限りにおいて、主観的基準における意識の判別は、随意的基準における意識の判別と一致する。我々がある内容を随意行動に利用できるとき、通常、その内容を報告できるのは、メタ認知システムの作動が、ほぼ常に大域的アクセスによって保証されているためである⁽¹⁰⁾。

こうして我々は、客観的基準、随意的基準、そして主観的基準において要求されるものの差異を、神経表象媒体と消費システムの相互作用の差異として特徴付けることができる。仮に現象性の有無や差異の基準として、いずれかの基準を採用するとしても、それは、アクセスの差異を反映する限りでの、現象性の有無や差異の基準である。結局、現象性からアクセスは切り離せない。一部の者は、経験的観点から、局所的アクセスと大域的アクセス（およびそれがほぼ常に保証するメタ認知的アクセス）の間に、明確な境界を想定するだろう。特に、我々の認知アーキテクチャにおいて、何らかの閾値以上の活性を伴う神経表象媒体が、自己増幅的にその内容への大域的アクセスを惹起するのであれば（そして大域的アクセスがメタ認知システムの作動をも保証するのであれば）、ある内容の利用過程は、局所的アクセスか大域的アクセス（及び報告可能状態）かの二状態をとるかもしれない。意識と無意識の二分法という、我々の強固な「前理論的直観」(Dennett, 2001)の背後にあるのは、我々がそのような認知アーキテクチャを意識の基盤として有するという経験的事実なのかもしれない。しかし、それらの差異が結局、どのような消費システムが内容へのアクセスを有しているのか、そして、一連の消費システムがどのような仕方でも内容へのアクセスを有しているのかの差異でしかないのならば、意識と無意識の境界は、神経表象同士の競合過程において近似的に実現されているにすぎない。

結語

いかなるアクセスからも解離された現象性なるものは、意識と呼ぶには値しない。我々はむしろ、現象性とアクセスの接続を明らかにすることで、意識を特徴付けなければならない。今回私が示したのは、大域的アクセスの概念が、単一の理論的枠組みにおいて、意識内容へのアクセスを包括的に捉えることを可能にすることである。大域的アクセス理論は、他の様々な理論や知見と連合しうる一種の研究プログラムであり(Baars, 2002)、今後さらに発展する見込みのある機能主義理論である。(11)

註

- (1) ただし FFA の機能に関しては論争がある。McKone, Kanwisher & Duchaine(2006), Bukach, Gauthier & Tarr(2006)を参照せよ。
- (2) 現象的 NCC の概念は、Chalmers(2000)の言う「内容 NCC」とほぼ同じである。
- (3) Dennett(1991, chap.11)は、次のような思考実験を提案する。仮に盲視患者が、識別を訓練されるだけでなく、盲視野の対象に関連する自身の行為を促進するように訓練されるとき、もはや彼の盲視野の知覚内容に関連する行為は、健常視野の意識的知覚内容に関連する行為と変わらない。このとき我々は、いずれの行為の背後にある状態をも、意識的と見なすはずだ。ここで、意識的知覚と無意識的知覚において対比されるのは、知覚内容の行動への影響である。
- (4) 私はここで、「準備されている」(poised)状態(Block, 1995)として一般に呼ばれるもの以上のものを、要求している(この点は、David Rosenthal 氏の指摘によって気づかされた)。現象性とアクセス可能性を巡る論争では、様々な論者が(単一の著作においてすら)、アクセス概念のもとで、利用可能性と実際の利用を、そして行動への利用と認知過程への利用を交互に指示するため、議論が錯綜しがちである。また、神経系におけるアクセスの基盤についての提案と、大域的アクセスによる意識の説明に対する批判的評価については、Churchland(2002, chap.4)を参照せよ。
- (5) 2.1 で見た両眼視野闘争では、顔表象内容と家表象内容が、大域的アクセスを巡って競合する。このような競合は、他の感覚様相においても起こる。例えば、左右の耳それぞれに異なる発話を与えられるとき、両方もが意味論的に処理されるものの、一方の内容だけが気づかれる(Cowan & Wood, 1997)。
- (6) 右頭頂葉を損傷した半側無視患者の一部は、感覚処理には障害がないにも関わらず、左視野の対象を無視し、それを随意行動に利用できない。しかし、彼らは左視野に関する知覚を失っているわけではない(Driver & Vuilleumier, 2001)。患者は同側空間の状況によっては対側空間中の物体を明示的に報告することができる。例えば患者は、右側に何もなければ、左側の対象を意識することができる。
- (7) Block が現象的意識とアクセス意識が解離する事例として挙げる、様々な現実の事例および仮想的事例は、消費システムによるアクセス状況の差異としてすべて説明することができる。Dennett(1995)を参照。
- (8) Dennett(1993)の脳内セレブと、Baars(1988, 1997)のグローバルワークスペースの類似点は、これまでしばしば指摘されてきた。例えば Block(2001)を参照。
- (9) Nichols(2001)はモジュール的なメタ認知システムを措定するが、もちろん今回の議論では、それがモジュール的な消費システムである必要はない。
- (10) このようなメタ認知システムが生産する高階思考なのであれば、大域的アクセス理論は結果的に、意識の高階思考理論(Rosenthal, 1986, 2005, Carruthers, 2000)をもっともらしくする。
- (11) 今回の研究に当たって有益な唆唆を与えてくれた藤川直也氏(京都大学/日本学術振興会)と David Rosenthal 氏(The City University of New York)に感謝する。

文献

- Baars, B. (1988). *A cognitive theory of consciousness*, Cambridge: Cambridge University Press.
——— (1997). *In the Theater of Consciousness: The Workspace of the Mind*, Oxford University Press. (2006, 荻阪直行監訳、『脳と意識のワークスペース』, 協同出版)

- (2002). 'The conscious access hypothesis: Origins and recent evidence', *Trends in Cognitive Science*, 6, 47-52.
- Blake, R. & Logothetis, N.K. (2002). 'Visual competition', *Nature Reviews Neuroscience*, 3, 13-21.
- Block, N. (1978). 'Troubles with functionalism', *Minnesota Studies in the Philosophy of Science*, 9, 261-325.
- (1995). 'On a confusion about a function of consciousness', *Behavioral and Brain Sciences*, 18(2), 227-287.
- (2001). 'Paradox and cross purposes in recent work on consciousness', *Cognition*, 79(1-2), 197-220.
- (2005). 'Two neural correlates of consciousness', *Trends in Cognitive Sciences*, 9(2), 46-52.
- (2007). 'Consciousness, accessibility, and the mesh between psychology and neuroscience', *Behavioral and Brain Sciences*, 30(5-6), 481-499
- Bukach, C.M., Gauthier, I. & Tarr, M.J. (2006). 'Beyond faces and modularity: The power of an expertise framework', *Trends in Cognitive Sciences*, 10, 159-166.
- Carruthers, P. (2000). *Phenomenal Consciousness: A Naturalistic Theory*, Cambridge: Cambridge University Press.
- Chalmers, D.J., (1996). *The Conscious Mind*, Oxford University Press. (2001, 林一訳, 『意識する心』, 白揚社.)
- (1997). 'Availability: The cognitive basis of experience', *Behavioral and Brain Sciences*, 20, 148-9.
- (2000). 'What is a neural correlate of consciousness?', in Metzinger (Eds.), *Neural Correlates Consciousness: Empirical and Conceptual Issues* (pp.17-40), Cambridge: MIT Press.
- Churchland, P. S. (2002). *Brain-Wise: Studies in Neurophilosophy*, Cambridge: MIT Press. (2005, 村松太郎訳, 『ブレインワイズ』, 創造出版.)
- Cowan, N. & Wood, N. L. (1997). 'Constraints on awareness, attention, processing, and memory: Some recent investigations with ignored speech', *Consciousness and Cognition*, 6, 182-203.
- Dehaene, S., Changeux, J.P., Naccache, L., Sackur, J. & Sergent, C. (2006). 'Conscious, preconscious, and subliminal processing: A testable taxonomy', *Trends in Cognitive Sciences*, 10, 204-211.
- Dehaene, S. & Naccache, L. (2001). 'Towards a cognitive neuroscience of consciousness: Basic evidence and a workspace framework', *Cognition*, 79, 1-37.
- Dennett, D. (1978). 'Toward a cognitive theory of consciousness.' in Savage (Eds.), *Perception and Cognition: Issues in the Foundations of Psychology* (pp.201-228), Minneapolis: University of Minnesota Press.
- (1991). *Consciousness Explained*, Little, Brown and Co. (1997, 山口泰司訳, 『解明される意識』, 青土社.)
- (1993). 'The message is: There is no medium', *Philosophy and Phenomenological Research*, 53(4), 889-931.
- (1995). 'The path not taken', *Behavioral and Brain Sciences*, 18 (2), 252-3.
- (2001). 'Are we explaining consciousness yet?', *Cognition*, 79, 221- 237.
- Dretske, F. (2006). 'Perception without awareness', in Gendler & Hawthorne (Eds.), *Perceptual Experience* (pp. 147-80), Oxford University Press.
- Driver, J. & Vuilleumier, P. (2001). 'Perceptual awareness and its loss in unilateral neglect and extinction', *Cognition*, 79(1-2), 39-88.
- Marcel, A. J., (1986). 'Consciousness and processing: Choosing and testing a null hypothesis', *Behavioral and Brain Sciences*, 9(1), 40-41.
- (1988). 'Phenomenal experience and functionalism', in Marcel & Bisiach (Eds.), *Consciousness in Contemporary Science*, Oxford: Clarendon Press.
- McKone, E., Kanwisher, N. & Duchaine, B.C. (2007) 'Can generic expertise explain special processing for faces?', *Trends in Cognitive Sciences*, 11(1), 8-15.
- Merikle, P. M., Smilek, D. & Eastwood, J. D. (2001). 'Perception without awareness: Perspectives from cognitive psychology', *Cognition*, 79, 115-34.
- Rees, G., Kreiman, G. & Koch, C. (2002). 'Neural correlates of consciousness in humans', *Nature Reviews Neuroscience*, 3, 261-70.
- Rosenthal, D. (1986). 'Two concepts of consciousness', *Philosophical Studies*, 49(3), 329-59.
- (2005). *Consciousness and Mind*, Oxford: Clarendon Press.
- Tong, F., Nakayama, K., Vaughan, J. T. & Kanwisher, N. (1998) 'Binocular rivalry and visual awareness in human extrastriate cortex', *Neuron*, 21(4), 753-9.
- Van Gulick, R. (1994). 'Deficit studies and the function of phenomenal consciousness', in Graham & Stephens (Eds.), *Philosophical Psychopathology* (pp. 25-49), Cambridge: MIT Press.
- Wolfe, J. M. (1999). 'Inattentional amnesia', in Coltheart (Eds.), *Fleeting Memories* (pp. 71-94), Cambridge: MIT Press.